

第41回

北海道透析療法学会

プログラム・演題抄録

会 長：高 橋 長 雄
会 期：平成4年6月14日(日)
会 場：札幌市医師会館

プログラム

- 1 透析前訪問を試みて74
 市立札幌病院 腎センター 長友 淳子 他
- 2 透析患者の食事制限部分緩和の試み74
 道立北見病院 透析室 芳賀ムツ子 他
- 3 低リンラーメン試食の分析75
 岩見沢市立総合病院 透析センター 斎藤 治美 他
- 4 Urea Kinetics Modeling 簡便法による血液透析患者における
 食事摂取量の検討75
 うの外科クリニック 林 峯子 他
- 5 高齢者透析患者の問題点 特に入院群と要介護群の違いについて
 ー多施設アンケートを基にしてー76
 勤医協丘珠病院 透析室 岩沢 夏美
- 6 当院の高齢外来透析について76
 腎友会岩見沢クリニック 老久保和雄 他
- 7 慢性血液透析症例の心理的検討（第16報）FINKの危機モデルについて77
 腎友会滝川クリニック 宮川 正充 他
- 8 血液透析終了2時間後に、高カリウム血症による
 急性四肢麻痺をきたした一例77
 林田クリニック 林田 紀和 他
- 9 当院における急性期血液浄化の現況78
 医療法人手稲沢仁会病院 ME部 中越 潔 他
- 10 透析液エンドトキシン（ET）減少化の工夫
 ー1年の経過についてー78
 腎友会滝川クリニック 鈴木 保道 他

- 11 UFC内臓型患者モニターの始業点検法79
旭川赤十字病院 臨床工学室 脇田邦彦 他
- 12 慢性血液透析症例におけるCr上昇速度及び、Cr/Cr比高値例の検討79
腎友会岩見沢クリニック 山本章雄 他
- 特別講演 透析骨関節症をめぐる諸問題
兵庫医科大学 井上聖士
- 13 高齢慢性腎不全患者の透析導入の指標80
市立札幌病院 腎センター 深澤佐和子 他
- 14 当科における短時間透析患者の検討80
北海道大学 第一外科 高橋昌宏 他
- 15 血液透析の動脈硬化に与える影響についての検討81
日鋼記念病院 腎センター 伊丹儀友 他
- 16 慢性血液透析症例の常時低血圧の臨床的検討81
市立三笠総合病院 腎センター 沢岡憲一 他
- 17 頭蓋骨CR写真に見られる脱灰像の検討82
札幌南一条病院 近藤正道 他
- 18 慢性血液透析症例におけるPTH分泌能の検討82
腎友会岩見沢クリニック 千葉栄市 他
- 19 透析歴10年以上の重症アミロイド症の検討83
腎友会滝川クリニック 菅原剛太郎 他
- 20 骨髄腫と透析の両者によると考えられたアミロイドーシス合併の
慢性透析患者の一割検例83
札幌医科大学 第2内科 石本朗 他
- 21 血液透析15年以上63例の検討84
岩見沢市立総合病院 大平整爾 他

- 22 当院における血液透析患者の動向84
旭川赤十字病院 腎臓・循環器科 山地 泉 他
- 23 当院におけるCAPD脱落症例の検討85
浦河赤十字病院 内科 松橋 尚生 他
- 24 PEPA膜ダイアライザーの自覚症状、臨床所見にたいする改善効果について ...85
北海道立北見病院 今野 敦 他
- 25 頻回にブラッドアクセストラブルを起こした症例の検討86
北海道大学 第一外科 今 裕史 他
- 26 低分子ヘパリンFR-860の使用経験86
市立釧路総合病院 透析室 畑 貴志 他
- 27 初診時すでに慢性腎不全に進展していた症例について
—小児および成人例に関する比較検討—87
夕張市立総合病院 腎臓透析科 横山 隆 他
- 28 人工透析患者における全身麻酔下消化器手術症例の検討87
札幌北楡病院 人工臓器・移植研究所 外科 久木田和丘 他
- 29 維持透析患者に合併した胃、食道静脈瘤に対して硬化療法を施行した2症例 ...88
勤医協中央病院 内科 沢崎 孝司 他
- 30 肺動脈弁閉鎖不全症により著明な心不全を呈した慢性透析患者の一例88
旭川赤十字病院 腎臓・循環器科 平田 顕文 他
- 31 IgD Myelomaによる腎不全の経過中にみられたリステリア髄膜炎の1例89
札幌社会保険総合病院 腎臓内科 橋本 史生 他
- 32 甲状腺癌を合併した二次性上皮小体機能亢進症の一手術例89
岩見沢市立総合病院 透析センター 大平 整爾 他
- 33 死体腎移植6例の経験90
市立札幌病院腎移植科 泌尿器科 力石辰也 他

1. 透析前訪問を試みて

市立札幌病院 腎センター

○長友淳子、山森 緑、新谷孝子
山口つや子、大野悦子、工藤泰子
多田眞千子、上田峻弘

当透析室に於いて、昨年度の透析導入患者数は71名と、ここ2～3年増加傾向にある。そこで私達は、少しでも不安の軽減を図るため、透析導入患者と透析室の看護婦との顔合わせを目的とした透析前訪問を試みたので、その結果と考察を報告する。訪問は透析のイメージがつくように絵を主体にしたパンフレットを使い、透析の流れに沿って説明した。その結果来室時笑顔もみられ、一度話しをしている看護婦なので安心できたと、殆どの患者に言ってもらえた。また、以前よりもスムーズにコミュニケーションがとれるようになり、その長所と必要性を再確認した。今後は、内容を充実させるよう検討を重ね、かつ、継続看護につなげて行きたいと考える。

2. 透析患者の食事制限部分緩和の試み

道立北見病院 透析室

○芳賀ムツ子、田辺郁子、橋本喜和子
木村マリ、松浦真里子、栗田みつ子

「食べること」は人間の本能的、かつ基本的欲求であるが、透析患者は制限食の中でその欲求を満たしていかねばならない。透析患者のQOLを考えた時、精神面や生きがいを持つ事ばかりでなく、人間の基本的欲求を満たされる事がQOL向上の基盤となると考え、制限食の中で食への欲求が少しでも満たされる方法がないかを検討した。K摂取制限が辛く果物を食べたいとの欲求を持っているとのアンケートの結果から、安全に摂取できると思われる透析日の透析開始直前、透析中の前半に希望の果物を摂取してもらい、患者の協力を得、経時的にK値をチェックした。血清K値の上昇もなく、食に対する満足感を得られたので、その経過を報告する。

3. 低リンラーメン試食の分析

岩見沢市立総合病院 透析センター

○斎藤治美、吉田邦子、清水洋子

長山勝子、大平整爾

和歌山県立医大腎センター

阿部富弥

ラーメンは国民食と称される程にポピュラーで、多くの人々に好まれている。ラーメンは種類も多く一概には言えないが、食塩・K・Pの摂取量が多くなるのが一般的な傾向である。私共は試作された透析患者用の低リンラーメンを実際に患者に試食してもらい以下の結果を得た：(1)味、歯ごたえ、量に関しては約半数の満足度でありなお一層の工夫を要した (2)Pの摂取量は有意に低下しこれは血清P値減少に反映した (3)食塩摂取が約0.5g/日増加したが、生化学値・血圧に影響しなかった (4)総コレステロール値は正常域の範囲でやや上昇した。以上から、ラーメンを好みこのため高リン血症を来している症例にはこの試作低リンラーメンは有用である。

4. Urea Kinetics Modeling 簡便法による血液透析患者における食事摂取量の検討

うの外科クリニック

○林 峯子、早川佳支子、西森明美

柏谷早百合、中村千文、高橋勝雄

岸本芳子、葛西裕実、川村真理

石橋賢一、鈴木克典、宇野弘昌

これまでは外来透析患者に対して、書き取り調査を基に食事内容を検討し食事指導を行ってきた。従来の方法では摂取量や内容が不正確、ましてや塩分量は推定の一語に尽き蛋白量、塩分量を正しく算出することは實際上殆ど不可能である。

今回我々は Urea Kinetics Modeling を用いた簡便法により、維持透析患者の蛋白摂食量、NaCl摂取量を測定し検討した結果、摂取内容と検査値から算定した摂取量とは良く相関することが判明した。更にこれらのパラメーターを検討し得られた所見と適正な蛋白摂食量について言及する。日常の臨床の場でこの数値を基に患者指導を行うと、理解し易く、効果も数値で表示されるので大変有利な方法と考えられた。

5. 高齢者透析患者の問題点 特に入院群と要介護群の違いに ついて

— 多施設アンケートを基にして —

勤医協丘珠病院 透析室
岩沢夏美

6. 当院の高齢外来透析について

腎友会岩見沢クリニック
○老久保和雄、山本洋子、野坂千恵子
山本章雄、滝川昌子、澤村裕一
千葉栄市

はじめに

今回我々は高齢者透析患者の透析治療状況で通院患者と入院患者の違いに注目して60才以上の透析患者についてアンケートを各施設に依頼してまとめた。

結果

これまでのまとめでは60才以上42%、65才以上27%、70才以上15%、75才以上16%であった。糖尿病を基礎疾患とする群は30.5%その他の群は69.5%である。また入院群と通院群に分けると入院群は26.3%で17.9%は社会的入院であり、通院群のうち14.7%は介護を要する。

まとめ

高齢化に伴う諸条件のなかで透析患者の安楽な透析の為にも、これまでの生活を支える種々の条件が欠如、または不足していると考えられる。

平成4年4月における当院の退職者を含む高齢の慢性透析例は20例51.3%であり9例が外来透析施行中である。その高齢外来透析例（65歳以上は4例ではあるが）を入院透析例と比較すると、

1. 独歩や身の回りのことが自立している。
2. 通院時間が短い。
3. 家族の協力が得られる。

などが挙げられる。9例の透析歴は1年以内が6例で一か月前後の外来移行が多い。透析導入時の気分の落ち込みが少なく、家庭内役割も果していると伺われる。透析中、後の除水に伴う血圧低下に細心の注意は要するが、体重増加は良好なことが多く、ソファーベットや椅子での透析施行者も多い。

7. 慢性血液透析症例の心理的検討
(第16報) FINKの危機モデルに
ついて

腎友会滝川クリニック

○宮川正充、近藤直人、浜口和夫
菅原剛太郎、老久保和雄

目的 透析例では、機械による生命維持を宣告され、多くの制約のもとで苦しみと葛藤を繰り返し、透析に適応していく。我々はその過程を(1)衝撃の段階、(2)防衛的退行の段階、(3)承認の段階、(4)適応の段階 (FINKの危機モデル) に分類し、各症例がどの段階にあるかを心理検査法を用いて検討した。

対象及び方法 透析歴5年以上の20例を対象に自我機能調査表 (EFI) と顕在性不安検査 (MAS) を実施し、A～Dの4群に分け、各段階分類を試みた。

結果 EFI、MAS共に安定したA、C群は透析を受容した生活が営まれ、(4)の適応段階にあったが、EFIが低くMASが高いB群、EFIが低いD群は(2)の防衛退行と(3)の承認の段階をくり返していた。

8. 血液透析終了2時間後に、高カリウム血症による急性四肢麻痺をきたした一例

林田クリニック

○林田紀和、前田涼子、滝沢義光
宮本治子

高カリウム血症は、透析中の空気誤入と共に2大頓死の原因であるが、日常の患者教育により予防出来る合併症であり、その為にも高カリウム血症による頓死だけは絶対ひきおこしてはならない。透析歴1年2ヶ月、51才の女性で、透析終了2時間後に、高カリウム血症による急性四肢麻痺をきたし、緊急透析により、歩行出来るまで回復した一例を経験したので報告する。日頃、時々軽度高カリウム血症がみられていた。症状出現する3日間高カリウム食を摂取しており、当日の透析前のカリウムは6.8mEq/ℓと高値を呈していたが、4時間の血液透析終了後、元気に歩行して帰宅した。その2時間後に全く四肢が動かなくなり、著明な徐脈をきたした。透析終了数時間で、この様な高カリウム血症による四肢麻痺をきたした報告は見当たらないので、どの様な機序で細胞内よりカリウムが流出してきたか不明であるが、若干の考察を加えて報告する。

9. 当院における急性期血液浄化の現況

医療法人手稻溪仁会病院 ME部
 ○中越 潔、山内良司、古川博一
 千葉二三夫、荒野隆之、渡辺 悟
 谷村 仁、下山芳正
 同 循環器内科
 本江正臣、峯廻攻守

当院は昭和62年にベット数500床、診療科目16科の総合病院として開設した。

近年、医療技術の発展と共に、数年前迄は救命しえなかった症例でも最新の高度医療技術により救命しうる様になった。中でも血液浄化では、治療ME機器及び膜素材等の急激な進歩により敏速な急性期対応が出来、各施設に於いて積極的に治療が成され、急性腎不全は基よりMOF（多臓器不全）等の患者に対しても非常に高い救命率を得ている。当院に関しても、総合病院の特色により、各科から様々な急性期の血液浄化依頼を受け臨床業務に対応しているが、今回我々はME部が対応している急性期血液浄化の経過と現況について検討を加えたので報告する。

10. 透析液エンドトキシン(ET)減少化の工夫、1年の経過について

腎友会滝川クリニック
 ○鈴木保道、田村 洋、福田謙一
 恒遠和信、菅原剛太郎

目的 近年、HP膜が普及するに至り、透析液中の細菌及びETの汚染が問題視され、透析液清浄化の必要性が生じており、我々もこの問題について検討してきたので1年間の経過について報告する。

方法 多人数用透析液供給装置（30人用）の回路において、B液タンクの自動洗浄装置の導入と、供給装置－コンソール間に除菌フィルター（ポリエーテルスルホン膜）を挿入し、各ET濃度をエンドスピー法にて測定比較した。

結果 本システム導入前と1年後のET濃度は、供給装置 $596.0 \pm 159.0 \rightarrow 4.5$ 、コンソール(1) $572.0 \pm 238.0 \rightarrow 3.6$ 、(4) $349.0 \pm 177.0 \rightarrow 2.7$ 、(28) $1260.0 \pm 131.0 \rightarrow 1.0$ 、(36) $1672.0 \pm 165.0 \rightarrow 1.2$ pg/mlといずれも低値で清浄な透析液を供給しえた。

11. UFC内臓型患者モニターの始業点検法

旭川赤十字病院 臨床工学室
 ○脇田邦彦、鷹橋 浩、見田 登
 旭川赤十字病院 腎臓・循環器科
 山地 泉、平田顕文、林かおる
 沢井仁郎

High performance membrane の普及に伴い、UFCの内臓型患者モニターが全国的に普及している状況である。確かにUFCは除水管理の簡素化、スタッフの省力化においてはメリットの大きい反面、UFCの故障時には大きな除水誤差を生じ、患者の生命をも左右するほどの医療事故につながる危険性を念頭に置くべきであると考え。そこで我々は除水トラブルの発生件数を可能な限り低下させる目的で、透析開始直前に行うことが可能で、比較的簡便なUFCの始業点検法を考案し、試行中である。この方法により、UFCの状態の把握や、事前に故障を発見する上で有用な方法であると考えられたので報告する。

12. 慢性血液透析症例におけるCr上昇速度及び、Cr/Cr比高値例の検討

腎友会岩見沢クリニック
 ○山本章雄、老久保和雄、澤村裕一
 千葉栄市

目的と方法 前回当研究会に於て、Cr値と筋肉量から得られた回帰直線に、Cr実測値を代入し算出された値を仮にCr理論値と定め種々の因子と比較検討したが、今回それらに加え、protein catabolic rate (以下PCR)、Urea-N、 HCO_3^- 、ADL等について同様に検討したので報告する。対象は一昨年から今年にかけて筋肉量、Cr値等を測定し得た症例延106例で、男性59例、女性47例である。年齢は 55.6 ± 15.3 歳であり、現疾患はCGN92例 (86.8%)、DM14例 (13.2%) であった。

結果 Cr理論値とPCR及びUrea-Nの間には一定の関係は見られず、筋肉量、ADL、HD歴の間には正の、 HCO_3^- 、PH、年令の間には負の相関が見られた。

13. 高齢慢性腎不全患者の透析導入の指標

市立札幌病院 腎センター
 ○深澤佐和子、新井田洋路、布施川尚
 桜井哲男、上田峻弘
 市立札幌病院 腎移植科
 力石辰也、平野哲夫

目的 高齢慢性腎不全患者における透析導入の指標としての血清クレアチニン (S-Cr) の適否につき検討する。

対象・方法 1989年から1991年までの3年間に当院にて透析導入された158人を対象とし、透析導入時年齢65歳以上をA群、65歳未満をB群とし、導入時のS-Cr値、尿素窒素 (UN) 値、血清 β_2 MG値を比較検討した。

結果 UN、 β_2 MGの値は両群間に差はなかったがS-CrはA群 8.13 ± 2.2 、B群 9.8 ± 2.7 とA群で有意に低かった。S-Cr値8.0未満の患者の割合はA群46.7%、B群19.5%とA群で有意に高率であった。UN、 β_2 MGの分布に有意差はなかった。

考察 高齢者の透析導入時期の決定にS-Crだけでは不十分であり、臨床症状や種々の検査成績を総合することが必要と思われる。

14. 当科における短時間透析患者の検討

北海道大学 第一外科
 ○高橋昌宏、今 裕史
 旭川医科大学 第二外科
 小野寺一彦
 札幌北楡病院 人工臓器・移植研究所
 外科
 Henryk Witmanowski、久木田和丘
 目黒順一、米川元樹、川村明夫

当科における透析患者総数は128名（男性74名、女性54名）で、長時間透析は101名（男性64・平均年齢52.2、女性37・平均年齢52.2）、短時間透析は27名（男性10・平均年齢61.7、女性17・平均年齢53.5才）であり、短時間透析は女性群でその比率が高く、男性群では高齢者が多い傾向にあった。今回、われわれは当科における短時間透析が至適透析となっているかを各種パラメーター (Kt/V、PCR、TACなど) を用いて調べ、検討したので報告する。

15. 血液透析の動脈硬化に与える影響についての検討

日鋼記念病院 腎センター

○伊丹儀友、安田隆義、辻 寧重
勝木良雄、乙部伸之、対馬克子

当センターの死亡原因の多くは動脈硬化に伴う血管合併症（脳血管障害、心不全）であるので、今回我々は血液透析の動脈硬化に与える影響を動脈硬化指数（AI；TC-HDL-C/HDL-C値）を用いて、過去2年間の推移について検討した。対象は午前中に2年以上重曹透析をしている糖尿病性腎症を除く患者17名（男4名、女13名）である。AIの20%の増減を各々悪化改善とした。

結果 10名に血清脂質の異常を認めたが、AIの改善（7名）、不変（7名）、悪化（3名）であった。AIを透析歴5年以下とそれ以上で比較すると、透析歴5年以上の群で低かった。以上より血液透析療法のみでは動脈硬化を促進しない可能性が示唆された。

16. 慢性血液透析症例の常時低血圧の臨床的検討

市立三笠総合病院 腎センター

○沢岡憲一、大村清隆

長期慢性血液透析症例における合併症の一つとして低血圧者の増加が認められる。

常時低血圧症例にいたっては、低血圧による臨床症状のため、日常生活に支障をきたす場合が多い。低血圧の原因として循環血液量の低下、自律神経機能障害、心血管系の障害等さまざまな原因がオーバーラップした病態が考慮される。

今回、当院においても、6例、常時低血圧と考えられる症例を認め、うち1例は原因不明のsevereな低血圧症例であった。心電図R-R間隔変動係数、寒冷刺激テストなど若干の自律神経機能検査を行い、検討を行ったので報告する。

17. 頭蓋骨CR写真に見られる脱灰像の検討

札幌南一条病院

○近藤正道、渡辺公二、井齋偉矢

札幌北楡病院

久木田和丘、川村明夫

札幌北クリニック

今 忠正

慢性透析患者のカルシウム代謝異常に基づく骨脱灰の指標として、頭蓋骨のCR写真に見られる所見の検討を行った。強調画像では程度の差はあるが、いずれもいわゆるSalt & Pepperの像が認められた。副甲状腺機能亢進症と診断、手術を受けた例では、その程度は極めて高度であるが、数ヵ月で改善する。c-PTHのレベル、及びALPのレベルとX線像を対比すると、いずれかあるいは両者の値が高い例に変化が強く見られ、副甲状腺機能亢進症の手術適応決定の指標に有力である。

18. 慢性血液透析症例におけるPTH分泌能の検討

腎友会岩見沢クリニック

○千葉栄市、澤村裕一、菅原剛太郎

目的 慢性血液透析症例にCa[⊖]透析を施行しPTH分泌能を検討した。

対象 慢性血液透析症例49例を対象とした。

結果 試験前にc-PTH 2.66 ± 5.26 ng/ml、後 3.41 ± 5.28 ng/ml、Ca⁺⁺前 2.29 ± 0.22 mEq/l、後 1.61 ± 0.20 mEq/lであった(n=49)。c-PTH 0～2 ng/ml群(35例)ではc-PTHは前 0.99 ± 0.53 ng/ml、後 1.57 ± 0.80 ng/ml、 Δ PTH 0.60 ± 0.41 ng/ml、 Δ %PTH 66.6 ± 47.5 %、c-PTH 2～6 ng/ml群(11例)では前 3.93 ± 1.00 ng/ml、後 4.78 ± 1.39 ng/ml、 Δ PTH 0.85 ± 0.69 ng/ml、 Δ %PTH 21.7 ± 15.5 %であった。 Δ PTHは Δ Ca⁺⁺や Δ T-Caとは関係なく、 Δ Pと正相関を示した。c-PTH0～2ng/ml群で試験後c-PTHが2.0ng/ml以上へ上昇を認めた症例は1/35例(2.9%)に過ぎなかった。

結論 慢性血液透析症例のなかにはPTH分泌能の低下している症例が認められた。

19. 透析歴10年以上の重症アミロイド症の検討

腎友会滝川クリニック

○菅原剛太郎、村上規佳、吉岡 琢
千葉栄市

目的 透析歴10年以上で2関節以上のう胞状X線骨透亮像（CRL）を認める重症多発性アミロイド骨関節症の臨床的検討を行ない、その発症について若干の考察を行った。

対象及び方法 重症ア症7例（男5、女2、CGN6、TB1）をA群、透析歴10年以上のCRL（-）の8例（男6、女2、CGN7、TB1）をB群とし、両群の透析条件及び各種血液生化学パラメーター、MCI及びΣGS/Dの比較を行った。

結果 A群が年齢で有意に高く（ $P<0.01$ ）、透析歴も有意に長く（ $P<0.01$ ）、CU膜の全透析期間に対する使用割合が有意に高く（ $P<0.05$ ）、全透析期間に対するHP膜使用期間の割合が有意に短かった（ $P<0.05$ ）。なお血中 β_2 -MG、AI、c-PTH、フェリチン、T-Ca、 Ca^{++} 、MCI及びΣGS/Dは両群間に差は認めなかった。

20. 骨髄腫と透析の両者によると考えられたアミロイドーシス合併の慢性透析患者の一部検例

札幌医科大学 第2内科

○石本 朗、浦 信行、買手順一
岩元利祐、菊地健次郎、飯村 攻
同 第2病理
佐藤昌明
うの外科クリニック
宇野弘昌

症例は54歳の男性。43歳時に透析導入47歳頃より回路内凝血を来し易くなり、視力も低下、53歳時には出血性皮疹をみたため、骨髄穿刺等の精査を受けIgG- λ 型の骨髄腫と確診された。平成2年4月より治療抵抗性の下痢、発熱、咳嗽・喀痰が出現、同年5月16日札幌大第2内科に入院。血漿交換療法にdimethyl sulphoxideを併用したが効なく肺炎にて死亡した。病理組織学的検索では冠、肺・胃動脈壁に比較的軽く、皮膚・消化管に著しい過マンガン酸カリウム抵抗性、 β_2 -MG染色陽性のアミロイド沈着を認めた。以上より本例は骨髄腫によるアミロイドーシスと透析によるそれが合併した極めて稀な1例と考えられた。

21. 血液透析15年以上63例の検討

岩見沢市立総合病院
 ○大平整爾、阿部憲司
 札幌北クリニック
 今 忠正
 田島クリニック
 田島邦好

透析歴15年以上例は63例で3施設320例の19.7%に相当し、全国平均の5.6%より高率であった。15年以上群(L)は30歳前後の若年導入に一つの特徴があった。検査項目では5年未満群(S)と比較してBUN, S-Cr, Alp, β_2 -MG, PTH, A α に有意な差異を認めた。rHuEPO使用率はL群で低率である。L群の収縮期圧は低目で持続的低血圧例が約8%に認められたが、Kt/Vからみた透析量には透析期間別の差異はない。

標準体重からみた『やせ』はL群の男子に目立ち、経時的なdry wtの漸減からも長期群の慢性消耗状態が懸念された。PTx、CTS手術、腎摘術もL群に多い。臨床的かつ各種検査値上、L群の骨・関節障害は顕著であり、このための長期入院は現在激増とは言えないが長期例対策の大きな問題の一つである。

22. 当院における血液透析患者の動向

旭川赤十字病院 腎臓・循環器科
 ○山地 泉、平田顕文、林かおる
 沢井仁郎

1991年4月～1992年3月の1年間に当院透析室に入院された91例について検討した。新規透析導入例は65例(5.4例/月)で、うち、ARF 16例とCRFの急性増悪13例の29例が緊急導入例であった。ARFは10例が離脱したが6例が死亡、術後やMOFによるARFの死亡率が高かった。CRF49例の原疾患はCGN22例(45%)、糖尿病性腎症19例(39%)、その他8例で、導入年齢は50代(11例)、60代(13例)、70代(16例)で82%を占めた。10例が死亡されたが、導入時全身状態が不良な高齢者の死亡率が高かった。一方、合併症治療目的の慢性透析患者は26例(2.2例/月)で、消化器疾患7例、整形外科疾患5例、脳出血3例、心疾患3例、その他が8例あり、20例が退院、3例が加療中で、3例が死亡され、特に脳出血の予後が不良であった。

23. 当院におけるCAPD脱落症例の検討

浦河赤十字病院 内科

○松橋尚生、佐藤 恵、鎌田 等

CAPDは腎不全治療の選択肢の一つとして認められているが、その長期予後は血液透析に比して劣ることも指摘されている。今回われわれは当院でCAPD治療を開始して以来7年間に、死亡例を含めCAPDから脱落した症例9例について検討したので報告する。

CAPD導入時年齢は 57.1 ± 15.1 歳、男性6例・女性3例、positive selection (P群) 4例・negative selection (N群) 5例、CAPD継続期間は、P群3~48月 (21.8 ± 19.5) N群3~50月 (20.3 ± 18.6)、脱落原因は、死亡4例(全例N群)・感染4例(P群3例・N群1例)・UF-loss 1例(P群)であった。

P群における感染はCAPD導入当初の手技・指導体制の未熟性によるものが主体であり、克服し得るものである。今後はUF-lossに対する対策が重要であると考えられる。

24. PEPA膜ダイアライザーの自覚症状、臨床所見にたいする改善効果について

北海道立北見病院

○今野 敦、山本真根夫、遠藤明太
三木隆幸、夷岡勉彦

慢性透析患者における“Quality of life”の向上には、自覚症状の緩和と合併症予防が重要であるが、透析患者の皮膚搔痒感や“Restless leg”に対しては未だ有効な治療法が確立されていない。さらに骨の合併症も、QOLに悪影響を与えている。種々の薬剤も十分な効果はなく、現時点では小分子から中分子量物質の十分な除去が唯一の有効治療法ではないかと思われる。合成高分子PEPA膜は、中分子量物質の除去のみならずPiの除去能も優れており、6ヵ月の臨床使用の結果から、自覚症状の改善にも大きな効果が得られる事が窺われた。さらにPi除去が優れAlp値も低下し、骨病変に対しても有効である可能性も示唆された。

25. 頻回にブラッドアクセストラブルを起こした症例の検討

北海道大学 第一外科

○今 裕史、高橋昌宏

旭川医科大学 第二外科

小野寺一彦

札幌北楡病院 人工臓器・移植研究所
外科

Henryk Witmanowski、久木田和丘

目黒順一、米川元樹、川村明夫

当院で維持透析を行っている患者125名のうち、ブラッドアクセス手術を行った回数の判明している122名を対象とし、このうち、手術回数が3回以上に及ぶ36例について、年齢、性、原疾患、透析期間、初回手術から再手術までの期間、最終ブラッドアクセス等について検討し報告する。

26. 低分子ヘパリンFR-860の使用経験

市立釧路総合病院 透析室

○畑 貴志、青田浩義

同 泌尿器科

田畑哲也、森田 研、佐々木芳浩

窪田理裕、榊原尚行

目的 低分子ヘパリンFR-860を使用し、通常のヘパリンとの作用性を比較検討した。

対象及び方法 対象は、当院透析患者で通常ヘパリンで残血傾向を認めた男性1名、女性1名の計2名であった。方法は、ACT値+80%になる通常ヘパリン量を基準に、加減調整したそれぞれの間歇投与と持続投与方法について検討した。ただし、FR-860の間歇投与は、初回の1回のみとした。

結果 止血時間が短縮され、総投与量を半減化し、透析の継続が可能であった。

考察 FR-860は、抗凝固剤投与の複雑性を軽減でき、さらには出血傾向の助長を防止せしめる有用な抗凝固剤であるとおもわれた。

27. 初診時すでに慢性腎不全に進展していた症例について

—小児および成人例に関する

比較検討—

夕張市立総合病院 腎臓透析科

○横山 隆、城下雅行

近年学校検尿、職場検診などが普及し、各種腎疾患の早期発見が成されている。しかし検診拒否や病院嫌いなどで潜在する腎疾患が発見されずに長期間経過して、初診時すでに腎不全に進展した症例も少なくない。演者らは最近小児4例、成人6例の患者を経験した。小児例では学校検尿や貧血、低身長などにて発見され、低形成腎、水腎症、Bartter症候群と診断された。成人例は全例定期職場検診の受診拒否や病院嫌いのため、発見が遅れ、しかも高血圧が重症心疾患も合併し、透析導入後短期間にて死亡した症例も認められた。小児および成人例に関しての発見時の状況、経過、合併症の予後などについて比較検討を試みたのでここに報告する。

28. 人工透析患者における全身麻酔下 下消化器手術症例の検討

札幌北楡病院 人工臓器・移植研究所
外科

○久木田和丘、Henryk Witmanowski

日黒順一、米川元樹、川村明夫

北海道大学 第一外科

今 裕史、高橋昌宏

旭川医科大学 第二外科

小野寺一彦

札幌北クリニック

今 忠正

人工透析患者においても全身麻酔下での消化器手術が必要とされる症例が、増加してきた。1985年1月より1992年1月までにわれわれが手術を行なった消化管出血3例、汎発性腹膜炎5例、胃癌と胆石の併発1例、大腸癌2例、胆嚢癌1例、胆石症4例、イレウス1例の17例（うち1例は重複）について、手術時年齢、透析歴、手術時間、術後合併症、死因について検討し報告する。

29. 維持透析患者に合併した胃、食道静脈瘤に対して硬化療法を施行した2症例

勤医協中央病院 内科

○沢崎孝司、佐藤忠直、八田一郎

金川 博、美馬聡昭

石川泌尿器科医院

石川登喜治

佐藤泌尿器科医院

佐藤業連

はじめに 維持透析患者群の肝炎ウイルスキャリアについて数多く報告されている。今回我々は肝硬変、肝癌に胃、食道静脈瘤を合併し、吐血をきたした症例に硬化療法を施行したので報告する。

症例1 T.S 65才 男性、主訴 吐血 腹水 C型肝炎、透析歴 6年10ヶ月。

症例2 I.Y 45才 男性、主訴 吐血 腹水 B型肝炎、透析歴 1年7ヶ月。

まとめ 維持透析患者の肝炎から肝硬変へ移行する症例も認められ、胃、食道静脈瘤の評価も要すると考える。

30. 肺動脈弁閉鎖不全症により著明な心不全を呈した慢性透析患者の一例

旭川赤十字病院 腎臓・循環器科

○平田顕文、林かおる、沢井仁郎

山地 泉

札幌医科大学 第二内科

近藤 進

症例は、57歳、女性。慢性腎不全にて昭和49年血液透析開始、以後順調に経過。平成4年2月20日、突然呼吸困難感、全身倦怠感を自覚したため近医入院。心房細動、低酸素血症を認め酸素投与うけるも症状改善なく、精査加療目的にて同年2月26日当科入院となる。入院時、理学所見上、頸静脈怒張と肝腫大を呈し、胸部レ線上、心拡大と肺門陰影の増強、心エコー上、肺動脈弁逆流、右室の拡大と左室の圧排を認めた。また、心臓カテーテル検査では肺動脈圧の上昇(52/13mmHg)、肺血流シンチでは陰影欠損を認めた。慢性透析患者では比較的稀とされる肺動脈塞栓症による右心不全症例を経験したので報告する。

31. IgD Myeloma による腎不全の経過中にみられたリステリア髄膜炎の1例

札幌社会保険総合病院 腎臓内科
 ○橋本史生、細谷英雄、戸沢修平
 北海道大学 第2内科
 赤塚東司雄

症例は57歳男性。H2年IgD Myelomaを発症した。H2年7月腎不全に陥り、当科を紹介された。その後HDを経て、H3年11月CAPDを導入した。この間化学療法を実施し、比較的安定していた。H4年1月腹膜炎を発病したが1月末には治癒していた。H4年2月末に嘔気、嘔吐、発熱が出現し、傾眠気味で応答の反応も鈍い状態が持続した。3月3日髄液採取にて混濁と細胞数の増加を認めた。3月4日呼吸停止し気管内挿管施行した。脳CTで浮腫、血管障害を認めず、3月5日髄液検査の結果でリステリア髄膜炎と診断しABPC大量投与も効なく3月8日死亡した。後日の検索にて起因菌は *Listeria, monocytogenes*, 4b型であった。

32. 甲状腺癌を合併した二次性上皮小体機能亢進症の一手術例

岩見沢市立総合病院 透析センター
 ○大平整爾、阿部憲司、中村健児

血液透析16年を経過した38歳、男子。漸次、c-PTHが上昇し骨関節痛が増悪してきた。頸部CT、シンチで上皮小体の腫大を認め、PTx（4腺）の上、一部自家移植した。術中、甲状腺左葉がやや硬く一部を生検したが、乳頭腺癌の病理診断を得て再手術で左葉摘出とリンパ腺郭清を施行した。術前の99mTcシンチで左葉のisotope uptakeが不良で、この点の読影に一考を要した。本道透析例中の癌腫108例中甲状腺癌は1例と少数であり、太田・小高らの報告も同様であった。一方、二木らの報告では悪性腫瘍46例中、甲状腺癌は7例（15.2%）と比較的高率であった。甲状腺癌の大半は生物学的悪性度が低く手術適応があり、上皮小体の画像診断に際して甲状腺に対しても十分な配慮が必要である。

33. 死体腎移植 6 例の経験

市立札幌病院 腎移植科

○力石辰也、平野哲夫

同 泌尿器科

渡井至彦、出村孝義、富樫正樹

大橋伸生

同 腎センター

新井田洋路、布施川尚、深沢佐和子

桜井哲男、上田峻弘

同 胸部外科

渡辺祝安、田中明彦

北海道大学 泌尿器科

金川匡一

はじめに 当院では平成元年 3 月までに 49 例の腎移植が行われ、うち 6 例が死体腎移植であった。この 6 例の経験と成績について報告する。

対象および検討項目 1989 年 11 月より 1992 年 3 月までに行われた死体腎移植の受腎者 6 例を対象とし、年齢、性、HLA mismatch 数 (A、B、DR)、阻血時間、移植後の透析回数、拒絶反応、移植腎の予後につき検討した。

結果 recipient の平均年齢は 39.5 才で全例男性であった。HLA mismatch 数は 0 ~ 3 平均 1.7 で適合性は良好であった。温阻血時間、総阻血時間はそれぞれ 8.3 分、8.6 時間で、移植後は平均 5 回の透析を要した。拒絶反応は、無し 3、急性拒絶 2、促進型急性拒絶 1、慢性拒絶 1 で、促進型急性拒絶にて移植腎を失った 1 例を除いた 5 例が透析から解放され、全例が社会復帰している。

結語 死体腎移植は生体腎移植と比し、遜色のない成績を示しており、今後も症例の増加と成績の向上が予想される。